”社会を明るくする運動”島根県推進委員会 委員長賞(第一位)

※ 委員長 島根県知事 丸山達也

大田市立大田小学校
六年 大迫 岳志（がくし）

つながる思い

ぼくは、「社会を明るくする運動」について知りませんでした。家族に聞いてみると、お父さんが話を聞かせてくれました。

ぼくのお父さんは、以前刑務官をしていて、今は社会福祉士として町役場で働いています。

刑務所は、罪を犯した人が自分の罪と向き合い、反省をして社会に戻る準備をする場所だと教えてもらいました。

刑務所は、起きる時間や刑務作業、入浴、寝る時間などがすべて決められています。そして、刑務所にいるということは、大切な人にも会えず、電話で話すこともできません。自分の子どもがいたとしても、その成長を見ることもできません。慰問があると涙を流す人もいるそうです。刑務所はとっても厳しく、自由がない場所なのだなと思いました。

そんな刑務所で、まじめに罪と向き合い更

20 × 20

生して社会に戻ろうとしているけれど、偏見や差別などで仕事になかなかつけず、また罪を犯してしまう人もいるそうです。

ぼくは、罪を犯す人はこわい人だと思っていました。しかし、お父さんの話を聞いて、偏見の目で見ないことや、うわさや先入観で人を決めつけないことが大事だなと思いました。

罪を犯した人たちは、どうしたら仕事につけて罪を犯さないようにし、安全な社会を作るための更生保護という活動があるということを教えてくれました。

更生保護には、保護司や保護観察官、BBS、更生保護女性会などたくさんの支援をする人たちが関わっているそうです。更生保護の支援は、生活の相談にのったり、家や仕事先をさがしたり、子育てを支援したりするな

ど、いろいろな支援があるそうです。偏見の目で見ないで、差別をせずに支援することで罪を犯す人が減って安全な社会につながるということを知り、支援する人たちはすごいなと思いました。罪を犯した人たちの社会復帰を支援することで、安全に安心して生活することができて、明るい社会にもつながっていくのだなと感じました。お父さんの知り合いの保護観察官やBBSの人たちにもっと話を聞いてみたいとも思いました。

ぼくは「社会を明るくする運動」について少しだけれど知ることができました。知っていく中で、お父さんがよく言っている「ふんのくらしのあわせ」だということが、安心で明るい社会につながっていくのではないかと思いました。

島根県保護司会連合会長賞（第二位）

前科は関係ない

大田市立大森小学校
六年　中田　星維来（なかた　せいら）

僕は一学期の社会科見学で裁判所見学をし、そこで「模擬裁判」を体験しました。台本にある裁判を行い、グループで被告の有罪・無罪を話し合う活動をしました。その中で、「被告人は前科があるって言ってた。前科があるから怪しい。有罪じゃないか。」という意見が出ました。ぼくも、そう思っていたので有罪にしました。裁判ではもちろん、それだけでは決まらないのですが…。

この作文を書くとき、「罪を犯した人」について考えました。殺人や強盗をして恐ろしい、悪い人だから近寄りたくない。まず、そう考える自分がいました。でも、罪を犯した人の中には、追い詰められて、どうしようもなく、自分を守るために犯した人もいるかもしれません。もしかしたら、生活の中でいろ

20×20

いろ上手くいかなくて、「なんでうまくいかないんだ。」という思いから、自分のことを否定されたように思い、今まで関わった人に対しても裏切りを感じたり、味方がいなくなった気分になったりしたのかもしれません。そうだとしたら「すべてがどうでもいい。」とやけになり、犯罪を犯してしまったという悲しい背景があったかもしれません。

本当なら、犯罪を起こす前に冷静に考えることができたらよかっただろうし、誰かが気づいて寄り添ってあげればよかっただろうけど、そうならなかったということは、その人に関わる人が少なかったということかもしれません。

こう考えると何だか気の毒な気持ちにもなりますが、「犯罪者」ということで、すべてを否定していいのでしょうか。そうすると、罪を償って刑も終えて生活をしている人に、「前科があるから。」という理由で犯人と判断するのはいけないような気がしてきました。

模擬裁判の時、ぼくは前科があるということが決め手になることに違和感がありませんでした。でも、その人のことを何も知らず、ただ「前科がある。」という情報に目がいってしまったように思います。そういう思い込みを乗り越えるためには、その人をきちんと人としてみるということが大切だと思います。「前科のある人」ではなく一人の「人」として考えたいです。罪をおかしたことは、なしにはならないけれど、罪を償いながら、反省しながら生活しているかもしれません。更生した人を温かく迎え入れられる社会にするために、表面ではなく、人の背景を気にかけることができる人になりたいです。

ぼくは普段、友だちとけんかしたとき、相手がなぜ怒っているのかわからない時があります。その理由が理不尽に思うときもあります。けれども理不尽だと思うのは自分だけです。相手にもきちんとした理由がある可能性があります。けんかをしたときは、相手をせめる

だけでなく、その人のことをもっと知って理解してあげるようにしたいです。

20×20

島根県BBS連盟会長賞

だれかを支えるために

大田市立大森小学校
六年　三ツ井　栄廣　みついよしひろ

ぼくは罪を犯した人をテレビでしか見たことがありません。だから「犯罪を犯した人。」ときくと、怖い、会いたくないなどの、マイナスな印象をもってしまいます。

「社会を明るくする運動」ということを今年初めて知りました。詳しく知るために、Webを開いて調べてみました。犯罪や、非行を無くすために、いろいろなことに取り組んでおられる人がいることを知りました。その方が保護司やBBS会員の方です。保護司とは、犯罪や非行をした人の立ち直りを地域で支える民間のボランティアさんです。BBS会員とは、様々な生きづらさを抱えている少年たちと、兄や姉のように身近な立場で接することで、少年たちの立ち直りを支援する青年ボランティアです。僕は、保護司のやりがいと

は何だろう、どの様な事が嬉しいのだろうと思いました。ぼくが住んでいる大田市にも保護司さんはおられることに驚きました。お会いすることはできませんでしたが、ネットでその思いを読ませていただきました。「保護観察を担当していた人がきちんと更生の道へ歩む姿を見ることができることが一番やりがいを感じられる瞬間です。」「近況報告が来たときには彼らの成長に喜びを感じました。」というやりがいと喜びでした。僕は、保護司の方のやりがいを聞いて少しでも多く更生の道へ歩む人が増えるといいなと思いました。

ぼくにも何かできないかな…と考えてみました。「実際に罪を犯してしまった人が近くに引っ越してきたら…。」と考えたとき、ぼくは「声をかける人」でもなく「さけてしまう人」でもなく「どちらでもない人」になりそうだなと思いました。でも、この「どちらでもない人が一歩踏み出すことが大切なんじゃないかと気づきました。

罪を犯してしまった人は、罪を犯したことで人とまともに話ができないのはきっと辛かったり、寂しかったりするでしょう。

僕は、罪を犯したことで話を聞いてくれなかったりすることは、とても辛そうだなと思いました。そのようなことがあると社会に戻ることをあきらめる人がいるかもしれないなと思いました。人は、犯罪や非行をする前のように接してもらえなければ再犯につながる可能性を増やしてしまう主な原因なのではないのかなと思いました。

人間は、色々な失敗をします。そこで、家族や親せきや友達に励ましてもらうと、励ましてくれた人のために頑張ろうと思います。それと反対に、もう一度頑張ろうと思っているのに、否定や拒否されるとてもつらい気持ちになります。

ぼくは、まだ小学生なので出来ることは少ないですが、これからしていきたいことは二つあります。

一つ目は、失敗した人がいても責めずに次からは、どうするか一緒に考えることです。

二つ目は、誰にでも進んで自分から声をかけることです。そうすることで、犯罪や非行をしてしまった人がたちなおろうと思ってくれるといいです。

このような、活動一つひとつが社会を明るくする力になれるといいなと思いました。

悲しいニュースが毎日のように報道されています。そのような悲しい出来事を少しでも減らし、社会を少しでも明るくしていきたいと思います。そのために僕の小さな一歩も役に立ったらうれしいです。

更生保護法人　島根県保護観察協会　理事長賞（第三位）

心の支え

大田市立第一中学校　二年

山内香梅（やまうちこうめ）

「犯罪者は悪い人。」

「犯罪者には人の心がない。」

友達に、犯罪者ってどんなイメージ？と聞いたときにかえってきた答えがこれでした。そういうものかな、と思いました。

私たちが日々過ごしているこの社会には、法律があります。法律は、誰もが安心して暮らしていくためにあり、絶対に破ってはいけないものです。ほとんどの人にとって、これは当たり前です。しかし、中には破ってしまう人がおり、この人たちの非行によって犯罪が生まれます。このような人たちは「犯罪者」と呼ばれ、人々からは恐れられたり憎まれたりする存在となっています。

私は、出所後の人たちがどのような生活を送っているのかが気になり、調べてみることにしました。そこでわかったのは、社会から

20 × 20

冷たい視線を浴びることや、ときには耐え難いような壮絶な人生があるということでした。

刑事裁判で実刑判決を受けた人は、刑務所に入ることになります。たとえ刑務所の中で真面目な態度で服役した受刑者であっても、釈放された後、完全に社会復帰することは、極めて難しいそうなのです。犯罪者には前科がつき、この前科があることで、世間では犯罪者への厳しい見方があるために、働く場所が見つからず、仕事にも就けません。家を借りることも、お金を稼ぐことも難しい、信頼していた人からも拒絶されるなど、社会から孤立してしまいます。このような人たちは再犯につながりやすく、実際に再犯者率は五割近くになっています。

前科のある人たちが立ち直るためには、安定した生活基盤、孤立を防ぐ人間関係、本人の意識、この三つの要素が不可欠だそうです。

私は特に、人間関係や本人の意識などの心理的な問題が大切だと思います。心の支えとな

って くれる 人が いれば、本人の 二度と 繰り返さ ないと いう 決意も、その 後に 選ぶ 未来も、すべてが 大きく 変わる からです。

実は 私にも、過ちを 犯して しまった 経験が あります。小学 五年生の とき、クラスの 中に T君と いう 男子が いました。T君は 私に 対して 急に 変な ことを したり、質問しても 全然 違う 答えが 返って きて 話が かみ合わなく なったり、周りの 人とは 少し 違う 不思議な 雰囲気が ありました。そんな T君が だんだんと 嫌いに なって、私は 陰で 悪口を 言ったり、からかったり して いました。自分と しては 軽い 気持ちで やって いたのですが、そのことを 知った 担任の 先生から、これまでに ない ほど 厳しく 叱られたのです。

怒られた 瞬間は、怖さと 恥ずかしさで いっぱいに なり、自分の して しまった 行いに 激しい 後悔が 襲って きました。しかし、先生は ただ 私を 突き放すのでは なく、何が 悪かったのかを 一緒に 考えて、その 後は 変わらない 態度

で見守り続けてくださいました。さらに、友達も私のことを遠ざけずに「これからは気をつけよう。」と言ってそばで支え、いつも通りに接してくれたのです。

もしもあのとき、先生から見捨てられ、友達も離れて孤立してしまっていたら、私はひねくれ、自分の間違いに向き合うこともなかったかもしれません。先生と友達という「心の支え」があったからこそ、過去の過ちを深く反省して、前を向くことができました。この経験を通して、人は誰かの支えがあったら、自分の過ちを認め、立ち直ることができるのだと身をもって知りました。

学校生活での失敗談と、犯罪という重い過ちを単純に比較することはできないかもしれません。しかし、孤立の恐怖や、向き合ってくれる人のいるありがたさは、同じではないかと思います。

どんなに強い決意があっても、たった一人で立ち直ることは極めて難しいことです。社

会に見捨てられ、自暴自棄になりかけたとき
自分の味方でいてくれる人が一人いるだけで
心の中の強い不安や恐怖は和らぎます。「自
分を見捨てない人がいる」という安心感は、
閉ざされていた心を外へ開き、前へ進むため
の生きる原動力につながるのです。

私たちは前科持ちの人を、怖いだの悪いだ
のと決めつけてしまいがちです。しかし、彼
らも同じ一人の人間です。一度の失敗で人生
がすべて終わりになり、二度と這い上がれな
い社会は、本当の意味で「明るい社会」とは
言えないでしょう。

大切なことは、人に対して誠実に向き合う
ことです。「そばにいるよ」という小さな寄
り添いが、ときに罪を犯した人を支える命綱
になります。一人一人が誰かの「心の支え」
であり続けること。そうすれば、社会は誰も
がやり直せる温かい場所に変わるのだと信じ
ています。